

2015年度個人特別研究費 研究成果概要

所属・職・氏名：文学部・教授・田和正孝

研究課題：沿岸漁業の地理学的研究における地域ネットワークの構築

研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究成果概要（2,000字程度）

本研究の目的は、(1) 石干見に関する文化地理学的研究および(2) 『兵庫県漁具図解』に関する生態地理学的研究・漁業史的研究であった。具体的にいうと、(1) については九州各地の石干見の保存活動を実践する諸団体とのネットワークづくり、漁具の保存状況および活用に関する調査と研究をすすめること、(2) については関西学院大学図書館が所蔵する『兵庫県漁具図解』（1897年刊行）に掲げられた漁業技術の検討、漁場利用形態の分析と解釈をすすめることであった。以下ではこれら2つに関わる研究成果を報告する。

(1) 石干見に関する文化地理学的研究

①現地調査等

2015年8月に長崎県島原市にて実施された石干見の活用に関するイベント（第5回スクイまつり）に参加し、主催団体（みんなでスクイを造ろう会）と交流し、石干見の保存と活用に関する情報を収集した。2015年10月3、4日には島原市で開催された「第5回九州沖縄石干見サミット in 島原」に参加し、地元の島原・雲仙・南島原の各市をはじめ長崎県五島市富江、大分県宇佐市長洲、鹿児島県奄美市、沖縄県石垣市白保などから参加した石干見の保全活動に関わる諸団体と情報を共有し、保存、文化遺産化などについて討論した。2016年3月には沖縄県宮古島にて狩俣の石干見復元および佐和田浜のカツの保全について聞き取り調査を実施した。同じく3月に鹿児島県奄美大島で石干見の残存状況について情報を収集した。

②学会発表・講演等

石干見の保全・活用などについて以下の報告をおこなった。

田和正孝「伝統漁具石干見の文化遺産化」（兵庫地理学協会5月例会、於：西宮市大学交流センター）、2015年5月31日。

田和正孝「石干見の文化遺産化」（第5回九州沖縄スクイサミット in 島原、於：島原文化会館）、2015年10月3日。

③論文

以下の論文を執筆した。

田和正孝（単著）「石干見のアーケオロジー—大西洋沿岸域における石積み漁法に関する予察的研究—」（印刷中）

世界の石干見をめぐる近年の研究動向をみると、これまでの歴史的研究、文化誌的研究に加えて、考古学的研究およびそれによって明らかになったこの漁具を文化遺産として考える立場が現われていることがわかった。そこで、本稿では石干見の漁具としての位置づけをふまえ、石干見の分布と考古学的研究について概観した後、南アフリカ共和国、イギリス、フランスにおける近年の石干見に関する研究成果について考察した。

(2) 『兵庫県漁具図解』に関する生態地理学的研究・漁業史的研究

①現地調査等

2015年8月から12月にかけて、兵庫県公館県政資料館（歴史資料部門）、兵庫県立水産技術センター、加東市教育委員会および加古川市流域滝野歴史民俗資料館、神戸大学社会科学系図書館、兵庫県立歴史博物館にて、『兵庫県漁業慣行録』や『漁業慣行調査書』、『製塩図解』など兵庫県漁業に関係する文書、史・資料を閲覧するとともにこれらの一部を写真撮影した。また、2016年1月には南あわじ市、2月には家島諸島坊勢島において沿岸漁業に関する聞き取り調査をおこなった。

②学会発表・講演等

兵庫県漁業および瀬戸内海の沿岸漁業に関する以下の報告をおこなった。

田和正孝「大輪田塾の10年一繋りの構築」（大輪田塾10周年記念式典、於：舞子ヴィラ）、
2015年7月4日。

田和正孝「昔、瀬戸内漁師に学んだもの—来島海峡の延縄漁—」（平成27年度大輪田塾修了式・
入塾式、於：兵庫県水産会館）、2015年11月2日。

③論文

以下の論文を執筆した。

田和正孝（単著）『『兵庫県漁具図解』の編纂に関する一考察—引用・参考図書との関係性をめぐって—』、関西学院史学第43号（2016年3月20日刊）、pp. 51-95。

『兵庫県漁具図解』の「緒言」によると、図解の成立は1897年（明治30年）8月であり、編者は大日本水産会兵庫支会である。編纂の主旨は兵庫県下における漁具の種類と使用の状態とを調査し、第二回水産博覧会に出陳して漁業上の参考にするためであった。説明は虚飾を避け、事実を明らかにすることを期し、掲げられた図も状態を忠実に示すことを主眼としていた。実地調査は、同年3月から8月までの6か月間にわたっておこなわれた。ただし、再調査し攻究する日数が十分ではなく、遺脱や誤謬が少なくないと思われるがそれらの修正は他日を期したい、ということも緒言に合わせて記載されている。精緻な解説と図が短期間で完成し、博覧会開催に間に合ったことは驚きである。よほど周到な準備がなされたのであろう。他方、依拠しうる既成の資料類が存在したのではないかと考えても不思議ではない。報告者の資料調査によって、大日本水産会兵庫支会が1897年11月10日に開催した第二回大集会の報告書が残されており、その中の会務報告に『兵庫県漁具図解』の編纂にかかわる記述があることがわかった。そこには緒言には記されていない編纂の状況、すなわち、嘱託された複数の調査員が自らの職がきわめて多忙であるにもかかわらず現地に赴き、資料収集に努力したこと、さらに、編集に際して引用図書があったことが報告されていたのである。本稿では、以上のことをふまえて、大日本水産会兵庫支会第二回大集会の会務報告で示された『兵庫県漁具図解』の編纂過程における文献の引用がどのようなものであったかを把握し、この図解と引用・参考図書との関係性について考察した。